

他者といかに向き合うか

—自由、平等、博愛・連帯に
向けて—

国際言語文化研究科
松本伊瑳子

「どんな集団も、自分を<一者>として定めるときは、ただちに、必ず自分の前に<他者>を対立させる。

[略]こうした現象は、人間の現実が連帯と友情に基づく共存在(ミットザイン)だけだとしたら理解できないだろう。[略]主体は対立することによってのみ、自分を定める。つまり主体とは、自分を本質的なものとして主張し、他者を非本質的なもの、客体にしようとするものなのだ。」

(シモーヌ・ド・ボーヴォワール著、『第二の性』を原文で読みなおす会訳

『決定版、第二の性』I事実と神話、新潮文庫、pp.16-17、平成13年)

下線・赤字は筆者。以下同様。

もし、もともと人間とその仲間との関係がもっぱら友好的な関係だったとしたら、どのようなかたちの隷属も説明がつかないだろう。隷属という現象は、自分の絶対権力を客観的に実現しようとする人間の意識の帝国主義の結果なのだ。もし人間の意識に、<他者>という本源的な範疇(カテゴリー)が存在しなかったら、<他者>を支配しようとする本源的な主張がなかったとしたら、青銅器の発見が女の抑圧をもたらすことはありえなかっただろう。

(シモーヌ・ド・ボーヴォワール『決定版、第二の性』
I 事実と神話、新潮文庫、p.125、平成13年)

- 本質:「そのものの特徴となっていて、それ抜きにはその存在が考えられない大事な性質・要素」
- 客体:「自分の外にあって、自分がそれを冷静に観察することができるすべてのもの」

本来は: 主体と客体の関係は相互的

実際は: 主／客の関係は一方的

「男は単に既存の世界を保存するよう努めたのではない。その世界の境界を打ち砕き、新しい未来の基礎を築いたのだ。〔略〕人間にとって最高の価値は生命ではないこと、生命は生命そのものよりもっと重要な目的のために役立てなければならないことを見事に証明するのだ。(略)人間が動物を凌駕するのは、生命をもたらすからではなく、自分の生命を危険にさらすからである。人類においては、産む性ではなく、殺す性に優越性が与えられているのはそのせいである。」

(シモーヌ・ド・ボーヴォワール『決定版、第二の性』 I 事実と神話、新潮文庫、p. 137、平成13年)

「すべての主体は、さまざまな**投企**を通して、具体的に自分を超越として立てる。すべての主体は、新たな自由に向かってたえず自分を乗り越えることによってはじめて、自由を実現する。果てしなく開かれた未来へ向けての発展こそが、現に生きている実存を正当なものにするのだ。」

(シモーヌ・ド・ボーヴォワール『決定版、第二の性』I事実と神話、新潮文庫、p.37、平成13年)

<何かの計画を立て、計画実現により、現在の自己から別の自己へと自己を高めていくこと>

「自分の身体から栄養をとって育つ他者を宿している
雌は、妊娠期間中ずっと自分自身であると同時に
自分以外のものでもある。出産後も、
雌は自分の乳房から出る乳で赤ん坊を養う。
だから、赤ん坊をいつ自律的なものと見なせるのか、
よくわからない。受精、誕生、離乳、どの
時点なのだろうか。」

(シモーヌ・ド・ボーヴォワール『決定版、第二の性』
I 事実と神話、新潮文庫、p. 71、平成13年)

妊娠・出産・授乳という女性の
身体機能が、女性を

「あらゆる哺乳類の雌のうちで、最も
徹底的に（自己）疎外」

してきた原因

(シモーヌ・ド・ボーヴォワール『決定版、第二の性』
I 事実と神話、新潮文庫、p.84、平成13年)

ボーヴォワールの主張に欠けているもの：

妊娠期間中あるいは授乳中、自分であると同時に他者でもあるという女性独特のあり方を肯定的に捉える視点。

<男性＝人間>としての
生き方である「投企に
よる自己超越」やその
ような主体の在り方を、
負の側面からとらえると
どうなるか。

エレーヌ・シクスー

(H el ene Cixous) :

- パリ第8大学の「女性学研究センター」の創立者でもありセンター長でもあったと同時に、作家や劇作家、評論家として、今も活躍している人。
- アルジェリアがフランスの植民地であった1937年にアルジェリアで生まれ育ったユダヤ系フランス人。

フランスの植民地時代のアルジェリア：

「世界は二つでした。すべての世界は二つで、いつでも初めに二つありました。多くの二つの世界がありました。」

(エレーヌ・シクスー著、松本伊瑳子訳
「私のアルジェリアンス」、『現代思想』
1997年12月号、p. 245)

西欧の文化は、男性／女性、
主体／客体、能動性／受動
性、太陽／月、文化／自然、
精神／物質、昼／夜、頭脳
／感情、というようにカッ
プル(二項)に分けることから
成立しています。

「フランス人のコーラスが一つの声となって、アラブ人は不潔で怠惰で盗人で役立たずだと言い放っていました。」

(エレーヌ・シクスー「私のアルジェリアンス」
『現代思想』1997年12月号、p. 237)

「分ける」こと:

→ 文明、とりわけ科学を発展させ今日の文明を築きあげる原動力であった。

と同時に、

→ 植民地主義といった負の側面も持ち合わせていた。

「分ける」つまり「カップル(=二項)があること」を研究しなければならない。

→「主体」としての男性のあり方、またカップルのあり方を批判。

→西欧男性が築いてきたのとは異なる主体のあり方であり、世界や他者との関係性です。

「もし私たちの内的世界が一つの自我と一つの性に限定されるなら、それは何と退屈な作品であり、何と不毛なことか。」

(エレーヌ・シクスー著、

松本伊瑳子・如月小春訳

『ドラの肖像—エレーヌ・シクスー戯曲集』、新水社、p. 230、2001年)

「子供は他者ですが、暴力のない他者、破滅や闘争を経ることのない他者なのです。」

(エレヌ・シクスー『メデューサの笑い』、紀伊国屋書店、 p. 40, 1993年)

「女性は、彼、彼女たち、彼らのなかに、束の間、熱烈に滞ります。（略）それから彼女は、この短い一心同体の抱擁に浸されたあとで、もっと遠くへ、無限へと過ぎ去ります。彼女のみがあえて内部から知ろうとするし、知ることを欲しもします。（略）彼女は、複数の存在になれることに混乱や驚異を感じたとしても、自分が未知の女性たちになっていることにふと気づくと逆らわず、変質できる自分の才能を楽しむのです。私は歌を歌う空間的「肉」であって、その肉の上に、どの私だか誰も分からない（男性か女性かの）私、多かれ少なかれ人間的だけれど、変身しつつあるゆえにまずは生き生きとしている私をつなぎ合わせるのです。」

（エレーヌ・シクスー『メデューサの笑い』、
紀伊国屋書店、 pp. 36－37 、1993年）

「自我の重みを捨てるのであって、

[略]

＜まったくの別人＞になるのではない。

[略] 私は他者ではないが他者を感じる場である。 [略] 私は別人であると同時に、

私の＜その別人ではないこと＞を保持しているのだ。 [略] 私たちは、自分が変容させられるおそれがあるのを知っている

人の幸福な感動を持って、「劇場」に行くのである。」

(エレヌ・シクスー『ドラの肖像』新水社、

pp. 230-231 、 2001年)

Amour Autre = 他者愛

Amour Autre = 別の愛

他者と一体化するという関係性の中で、自己を見失う危険性。

→必ず再び自己に戻る必要性。

→この他者との一体化は束の間のもの。

「戯曲の作者であることは、（略）私自身の存在を解体します。乱暴なやり方で解体します。書いているとき、私はいつも近親者たちに、夜私に近づいてはいけない、私は狂女のようなだからと言います。私は失われています。（略）この作用、同一化の作用が、私を私自身と同一化させず、しかもそれが非常に強烈なので、夜がやってくると、私は本当に我を忘れています。（略）私はすべての他者であって、私ではありません。」

（エレーヌ・シクスー『ドラの肖像—エレーヌ・シクスー戯曲集』新水社、pp. 210-211、2001年）

incarnation (=具現、具象化) と呼ぶことが可能なら、さまざまな人物になることはré-incarnationと呼べるでしょう。

Réとは「再び」という反復、繰り返しの意味です。incarnation を繰り返すということです。

réincarnationとはフランス語で輪廻転生を意味する言葉でもあります。

生きたまま輪廻転生を繰り返すことによって自己超越しようということ。

西欧人特有の自我の強さを
捨て、一時的に自我を捨てる
他者体験をし、そうすることで、
自分を変革していこう、
自己超越していこう。
そして平和で友好的な世界へ
と変革していこう。

文部省の『国体の本義』：
西洋の「分ける」文化を批判し、
「国民帰一」ということを謳って
います。

日本人は、明確な主体性を持つこと
より、自他を区別しない傾向があり、
何かに同一化しやすい国民だとい
うこと、その結果、個人の尊重よりマス
として扱われやすい。

川端康成の小説『雪国』：
冒頭の文章は、

「国境の長いトンネルを抜けると雪国
であった。」

(川端康成『雪国』、
現代文学大系33、p. 5、昭和39年)

天気 : It is fine. Il fait beau.

時間 : It is 4 o'clock. Il est 4 heures.

形式上でも主語がないとやっていけない言語。

「お腹すいたねえ、
ご飯食べに行こうか」

「腹減ったなあ、
飯、食いに行こうか」

大部分の学生の訳： I am hungry.

何人かの訳： We are hungry.

日本語は主語がなくても平気で、
あいまい。自他が混在している。

腹減ったなあ、お腹すいたねえ。

→I am hungry. How about you? と訳す。

日本語では一つの文章が、
英語では異なる2つの主語の
2つの文章に訳されています。
一つの文章には訳せない。

自他は明確に区別。

主体的・自立した人間として自己向上を目指す。

心身の自由が保障されている必要性。

「自由・平等・博愛」: フランス革命の標語
liberté, égalité, fraternité

fraternité = brotherhood 兄弟愛

「人権宣言」:
実は「男性と男性市民のための権利宣言」

「自由・平等・博愛」あるいは「自由・平等・連帯」

sisterhoodというと、フェミニズムにおける女性の連帯

人は依存者として生まれ、

依存者として死んでいく。

縁とは人と人、人と社会との関係性のこと。

愛もまた文化。愛という文化が継承される必要がある。

そこに連帯が生まれます。

自由・平等・博愛＝連帯は民主主義の根幹。

自他の区別があいまいではなく、各人それぞれが自由に個人個人の生き方、考え方を大事にして、自由に主体的に生きることができると同時に、自分の意見はしっかり持っていても他者にそれを押し付けない、そして性別・年齢・国籍・職業に関係なく、平等な人間として扱われ、それを万人に保証するという博愛＝連帯の精神が必要です。人が平等に尊厳をもって扱われるような社会制度が必要です。

主体／客体の問題＝自由、
平等、博愛・連帯の問題。

他者とどのような関係性を
作るかという問題。

クリスティーヌ・ボーデン Christine Boden

オーストラリアの元女性首相

49歳で若年性アルツハイマー症を発症。

『私は誰になっていくの？』

『アルツハイマー病者から見た世界』

Who will I be when I die?

(桧垣陽子訳、クリエイツかもがわ、2003年)

認知症の人の主な症状は記憶力の低下です。だから同じことを何度も聞き返したりします。だから認知症でない人は、認知症の人とはまともな話ができないと思いがちです。ならば、認知症の人とは究極の他者だともいえます。

認知症高齢者の扱いに、その国の高齢者や処遇に対する考え方が象徴的に見られるのではないかと考えた。

要介護・要看護高齢者のことを
personnes âgées dépendantes
依存高齢者 と呼んでいる。

介護:「病人などを介抱し看護すること」、
看護:「けが人や病人の手当や世話をすること」

依存高齢者:あくまで非依存、つまり**独立・自立**ということが基本にあって、その前提のもとに**自立の手助け**をするという**視点**が出てくる。

フランスでもスウェーデンでも個別介護が前提。

スウェーデンでは介護プランは日本のように一律の基準がなく、本人の心身の状態に応じて作ります。

そのために高齢者施設に入る際には、徹底してその高齢者について尋ねます。

家庭は「**普通の家**」、高齢者施設は「**特別な家**」と呼ばれている。

「特別な家」はあくまで「普通の家」の延長です。

職員は新たな家族です。

個人の要望を尊重する

- * 朝食を自分の部屋でも、皆と一緒に食堂でとることもできます。
- * 時間も7時半から10時くらいの間の好きな時間。
- * 食事介護が必要でない場合は職員と老人たちが一緒に食事。
- * 昼食や夕食はメニューも選べるところが多い。

食事をしたことを忘れたら

- * 量を少なくしてサンドイッチとか果物とかをだす。
- * また分量を減らして出す。

個人を尊重するというのは、このように誤った認知であれ、本人の気持ちを大事にするということです。特に認知症の人に対しては、本人を否定するのは、自信喪失につながるのです、よくないのです。

デイサービスへの送迎:

日本:施設側のマイクロバスに皆一緒

スウェーデン:タクシーで一人一人送迎。個人用タクシーで、送迎時間も個人により若干の差。毎日決まった運転手が送迎してくれ、タクシー代もほとんど無料に近い。

スウェーデンのかなり進行度の高い認知症高齢者用施設

人々は30分テーブルの前に座っているのが限度。そのうちの一人は音楽好きだということで、夜、介護士の一人とコンサートへ出かけた。

認知症の人たちは過去のことについてはよく覚えている場合が多い。

→過去のおもちゃだとか流行した人形とか、誰もが行ったことのある場所の写真とか、そういうものを入所者に合わせて介護士たちが作ったり集めたりして、それらについて話をしてもらおう。

介護士たちが手作りでこういうレミニサンスの試みをする。

朝食後はスウェーデンでは認知症がかなり進んでいると思える人たちの施設も含めて新聞を読んでいた。介護士が新聞を読み、それについてみんなでディスカッションします。

認知症といえども、大人として、教養ある人として扱っている。

認知症の主な症状：記憶力の低下

周辺症状：徘徊とか暴力、大声をだす、
異食など。

彼らの内面に入っていけば、周辺症状をなぜ示すのか、よく理解できるようになります。そして彼らの気持ちに寄り添ってそれなりの対応をすると、周辺症状が治まってきます。

ここに私はエレーヌ・シクスーが他者の心の中に入って他者体験をしようとした実践例を見るような思いがします。

認知症には約70もの種類

認知症の種類によってその反応も違う。

その対応を変える必要があり、スウェーデンでは施設ごとに、どの認知症高齢者を受け入れるか決めていきます。

また認知症の進行度によっても、受け入れを区別しようと努力しています。

「痴呆症老人のケア計画やニーズ査定は、必ず精密な医学診断を行ってからするのが原則です。真性か疑似性か、どのタイプの痴呆なのか、どのくらい進行しているのかなどは、ケアを計画するにあたり重要な要因をなします。」

（訓覇法子『現地から伝えるスウェーデンの高齢者ケア

—高齢者を支える民主主義の土壌—』、自治体研究社、p. 14、1997年）

「病気が進んでいる人と一緒にいると恐怖を感じてしまいます。恐怖感がなければ本来の能力を発揮できます。診断をきちんと行い認知症のどの段階かをはっきりさせて、同じ段階の人のグループを作る必要があります。」

(クリスティーヌ・ボーデン、

『私は誰になっていくの？アルツハイマー病者からみた世界』、
 桜垣陽子訳、クリエイツかもがわ、p. 217、2003年)

日本の高齢者施設では、決まった時間に、決まった食事を出すことが、入居者の気持ちより大事。これではペットにえさをやるのとなんら変わりがありません。

そして決まった時間にトイレに行かされ、決まった曜日と時間に風呂に行かされ、夜尿の恐れのある人は寝る前にオムツを付けさせられます。

スウェーデンでは、おむつさえ、いやなら拒むこともできます。拒めば施設のほうで、ベッドに防水シートのようなものを敷いて対応しています。

自分たちはプロである。

職員に対するグリーフケアは？

→自分たちはプロだから、高齢者が死んだからといって、いちいち落ち込んでいたのでは仕事にならない。悲しくないわけではないが、グリーフケアが必要になるくらいならプロとはいえず、そういう人は介護の仕事が向いていないのだから、やめたほうがよい。

プロ意識が高い。

介護する人たちが自分たちでどのような介護をするのかを決める。

仕事を愛している。

介護職の人たちの待遇:

普通は週40時間労働。

介護職は37時間労働。

勤務は2交代制、朝7時から4時までか、午後の1時から9時半まで。

夜は夜だけ働く人が二人いて、夜の9時15分から朝の7時までパトロール。

彼の職場は、そこで働いている人が誰もやめないベストの仕事場。

彼に満足をもたらす理由

- ①機械とではなく人と仕事ができること。
- ②家族的に仕事ができること。
- ③人を助ける仕事であること。
- ④スタッフはいっしょにこの施設を作り上げた仲間であること。
- ⑤介護のためのいろいろな試みを自分たちで工夫して行えること。

9人の入居者に対して8人で面倒をみている。

彼の給料：21000クローネ（ $21000 \times 13,5 = \text{約}283,500$ 円）

日本の介護士の離職率：18.7%です。

そのうち1年未満で止める人が39%、

1年以上3年未満の人が36.5%。

日本では常勤職員の場合、月に5回から6回の夜勤。

「2007年度調査では福祉施設で働く男性介護員の平均年齢は32.6歳と若いことありますが、給与平均は22.6万円。全産業男性（平均41.9歳）の37.2万円より15万円も安く、女性も平均20.4万円で4万円ほど低くなっています。」(中日新聞2009年6月28日)

日本の認知症高齢者：220万人

特別養護老人ホームの待機者：
40万～50万人

介護労働者：さらに50万人必要

日本政府：施設介護より安上がりな在宅介護に
重点を置こうとしています。
財政的理由による。

スウェーデン：在宅介護の方針が主で、施設介護は
わずか6%。
施設より自分の家で人生を送るほうが
はるかに幸福だと考えられているから。

「独立した住まいは、独立した人格の尊重である」

(訓覇法子『現地から伝えるスウェーデンの高齢者ケア』自治体研究社
1996 p.25)

「施設は生活の場所としてはふさわしくない」

(訓覇法子『現地から伝えるスウェーデンの高齢者ケア』自治体研究社
1996 p.37)

自立を助けるために、在宅の場合：

住宅改造や、杖、歩行器、あるいは電動車いす、リモコン式のドア開閉装置といった補助器具のサービス。

「作業療法士が家庭訪問をして、どういう住宅改造が必要か、補助器具はどんなものが必要かを認定し」、「認定が済むと福祉事務所がプランに基づいて住宅改造工事をする」。これは無料で行われています。

（訓覇法子『現地から伝えるスウェーデンの高齢者ケア』自治体研究社 1996 p.16）

ニーズに応じた器具を借りたり、無料の住宅改造工事を受けることによって、「機能障害を持っていても住み慣れた我が家で今までどおりの暮らしを続けることができる。」

（訓覇法子『現地から伝えるスウェーデンの高齢者ケア』自治体研究社 1996 p.17）

腕時計のように、手首にアラームをつけています。24時間いつでも、どこでも、気分が悪くなったとき、倒れた時にアラームをならせば、サービスハウスにつながり、介護士が二人駆けつけてくれる仕組み。

老老介護はない

「情緒的な支えは夫婦や家族でなければ難しい」

(訓覇法子『現地から伝えるスウェーデンの高齢者ケア』自治体研究社
1996 p. 11)

「家族生活を支えるのが公共の任務である」(訓覇、同上、p. 50)

「フォーマルな公共サービスとインフォーマルな家族の支えがあってはじめて、介護が無理なく楽しく持続できる。これがスウェーデンでの在宅ケアについての考え方」(訓覇、同上、pp. 11-12)です。

現在では「一人住まいで、しかもかなり介護ニーズの高い後期高齢者でも安心して24時間生活できるシステムが、どこでも整備されているというのがスウェーデンでの現状です」(訓覇、同上、pp. 25-26)

日本：

家族同居の場合：

「生活援助」は使いにくい。

家族介護者の23%がうつ状態。

(2009年5月4日、毎日新聞)

家族介護の問題点：

介護のために退職

→無収入になる

→生活が苦しくなる

→介護サービスの使用を控える

日本: 介護の仕事の官民の仕分けがあいまい。

スウェーデン: 介護施設は基本的に官の経営。

民間委託をすることはありますが、きびしく監視されています。

日本では介護は民間に任せているために、

- * 不十分な施設で、
- * 介護に群がる人々の利益優先のために、
- * 入居者は「個」としての取り扱いを受けず「モノ」として扱われ
- * 介護される人は主体的に自由に生きることもできず、
- * 介護者と介護される人は平等ではなく、
- * 介護する人は疲れきっていて、
- * 低賃金に甘んじて未来の展望もありません。

税金:

サラリーマン: 収入の28%から32%が所得税。

この所得税は市に払う地方税で市により税率が異なる。

雇用者税: これは人を雇った場合、例えば20万の月給で人を雇ったら、20万円の32.4%を雇用者税として市におさめる。

市の財政の25%は教育に、50%近くは福祉に使われています。県は保険と医療に約80%の予算を使っています。(訓覇法子、同上、p.16)

国税として:

物品税(日本の消費税にあたる): 物品税の税率は品種によって異なり、食品は12%、そして他のほとんどが25%です。

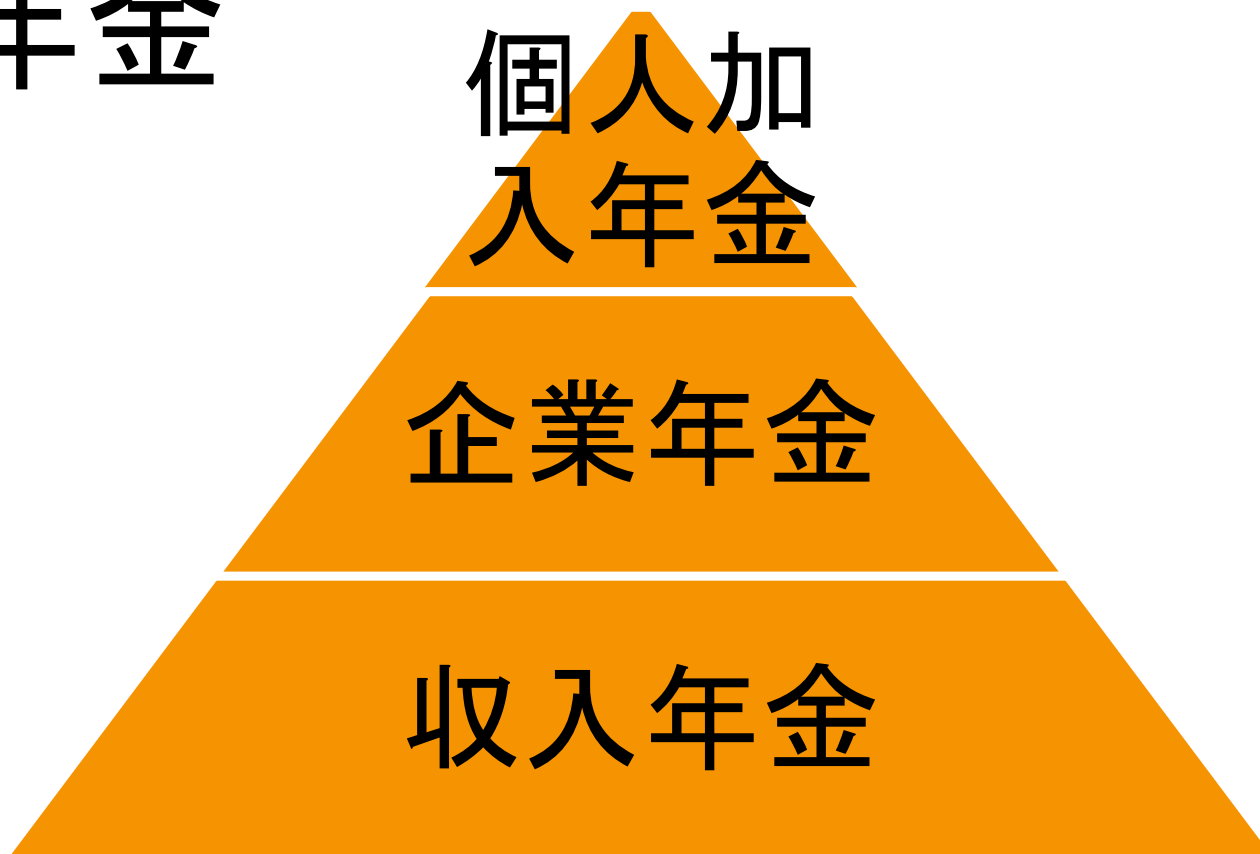
特殊税: ガソリン税や不動産税。

年金

個人加入年金

企業年金

収入年金



ギャランティー年金(保証年金):

収入年金がどれほど少なくても、保障される額。

独身者の場合、現在月に7597クローネ

($7597 \times 13,5 = \text{約 } 102560 \text{円}$)

結婚している場合: 月に6777クローネ

($6777 \times 13,5 = \text{約 } 91490 \text{円}$)

老人ケアのための保護保障:

必要経費 = 家賃、新聞代、テレビ視聴代、定期代

普通の家: 必要経費を差し引いた額が4831クローネ

($4831 \times 13,5 \text{円} = \text{約 } 65219 \text{円}$)

特別の家: 1500クローネ ($1500 \times 13,5 = \text{約 } 20250 \text{円}$)

手元に残らないといけない。

必要経費：家賃、新聞代、テレビ視聴代、定期代

家賃：6200クローネ（約83700円）まで。

1カ月の定期券：地下鉄とバスが乗り放題。

住居と食事代と文化的で人間らしい生活を送ることが、あらゆる人に平等に保障されている。

2008年度に検挙・補導された9万6256人のうち:

- * 65歳以上の高齢者は24.9%。
- * 彼らが万引きした品物は食料品が77%と最も多く、被害額は1000円以下の商品が約半数を占めています。
- * 63.7%が収入なしと答えており、生活苦や将来の不安から生活必需品を盗む高齢者が目立っています。
- * また9割は友達が「いない」「少ない」と答えており、万引き高齢者の4分の1が孤独な状況にいます。(毎日新聞、2009年9月19日)

*育児手当。学費・給食費は小学校から高校までタダです。
大学の授業料もタダ。

*大学生には無返済で月に1050クローネ
($1050 \times 13,5 = 14175$ 円)支払われています。

*医療費も年間900クローネ(12150円)が上限で、それ以上は無料です。

*入院費は1日80クローネ。手術は無料。

*薬代は初回は170クローネで、2回目からは70クローネ。

*しかしこれらの医療費は年間1800クローネまでしか払う必要はありません。

あとは無料になりフリーカードがもらえます。

「育児有給休暇、年間60日間の介護有給休暇。

さらに子供の病気の介護に対して、一時的両親手当が12歳以下の子供一人につき年間60日間、所得比例で支払われます」

(訓覇法子、同上、p. 91)

有給休暇:

私が会った介護士の話によると、

25日5週間の休み。

40歳になるとプラス5日、6週間になります。

50歳になるとさらに1日プラスされます。

これ以上は休暇は増えません。

スウェーデン人はサービス残業は絶対にしない。

確かに税金は高いが、育児手当、医療費、学費代、年金として、税金が戻っている仕組み。

2009年に行われた日々の暮らしの不满に関する愛知県民世論調査：

70歳以上を除き、「収入・貯蓄」が最多を占め、2番目は、20歳～40歳代が「仕事」と答えています。

（毎日新聞、2010年1月8日）。

万人平等の民主主義：

高福祉がすべての人に保証され、

すべての人が同等の価値を持つ。

「今までの福祉のスタンダードを下げないためならさらに税金をあげてもよい」と国民の7割が言っているのは、税金がとられるものではなく前払いする、還元されるものだとみなしているからです（訓覇法子『スウェーデンの高齢者ケア』自治体研究社 1996 p.101）。

スウェーデンのような「社会扶助方式の強さは、自分の力で生活を営めなくなったときに最低限ではなくスタンダードの生活が保障されることと、質の良いサービスがどこに住んでいてもすべての人に平等に保障されることです。」（訓覇法子、同上、pp.100-101）

労働組合や生活協同組合は言うに及ばず、年金者団体、障害者団体、こういった多くの団体が組織されていて、スウェーデン人は平均して三つの団体に所属している。

「政府を批判する団体に助成金を出すのはおかしい」という意見もありますが、「国や自治体を批判する組織運動は民主主義を擁護するために必要なのだ」という立場を貫いています。批判する勢力があってはじめて民主主義は強固なものになる、という考え方は大変大事な視点だと思います。」

（訓覇法子『スウェーデンの高齢者ケア』自治体研究社
1996 p.126）

まとめ

誰もが誰からも愚弄されることなく、屈辱感を抱くことなく、人から尊重されて生きたいと思っています。すべてのひとが自立的・自律的に、かつ他者からは敬意をもたれながら一生、普通に生活できるような社会制度設計を行ってほしいのです。

皆さんの活躍を

期待します！！！！

終